

大学生における地域実践の意義に関するノート

——学生座談会をもとに——

Notes on the meanings of regional practice for the university students

—through student round - table talk—

大谷直史 OOTANI Tadasi (准教授 教員養成センター)、筒井一伸 THUTHUI Kazunobu (准教授 地域政策学科)、福田恵子 FUKUDA Keiko (教授 学習科学講座)

キーワード：地域実践 regional practice、ボランティア volunteer、地域教育 regional education

1. 課題と方法

本論では、地域実践にかかわってきた学生による座談会の記録を参照しながら、大学生が地域実践を行うことの意義の類型化を試みる。その際、学生が地域実践に参入する動機や求める内容によって、その意義が異なっていることを示したい。それはこれまで大学生の地域実践の意義を論じる際に、活動の主体である大学生の視点が希薄だったと考えるからであり、一般的に論じられていた地域実践の意義がその当人(の意識)によって異なることに留意する必要があると考えるからである。このことは、たとえば受け入れる地域と大学生のミスマッチの問題を回避することにもつながる。

ここで述べる地域実践は、大学が提供するものや自発的なボランティア活動、調査実習として行うものなど地域に対して積極的に行動するものを含む広い概念として用いている。それは地域実践なるものの内実が多様に過ぎるためでもある。そもそも「地域」という概念が多義的であり、「構造的—規範的—実践的」それぞれに捉えることが可能で、「生の充実」や「わたしたちの幸せ」を支える関係性でもあり、時空間でもありと議論されている。さらに「地域実践」となれば、たとえば公務労働であったとしても、それが特定の地域を対象とする活動であれば地域実践と云うるかもしれない。ここでは学生の声から地域実践の意義を拾い集めていくという目的から、地域実践をあえて限定せずに論じることとする。

とはいえ今後の議論のためにも、ある程度の指針が必要だろう。たとえば森秀樹は4象限からなる表1を用いて、ボランティア活動を自発的かつ公共的なものとして類型化している(なお自発性は、利害関係に基づかないものとされる)ⁱ⁾。地域実践はこのボランティア活動と親近性があると考えられるが、インターンシップで訪ねる先は経済的な利潤を追求する活動であることも多く、当人にとっても就職活動の一環として捉えられているかもしれない。また地域経済の活性化や行政活動も含むこともあり、どこからどこまでを地域実践と呼んで良いのか、やはり境界線はあいまいである。しかしながら、少なくとも利己的な動機のみ支配されず、なんらか公共的な広がりを持つ概念として地域実践を想定することに

したい。

表1. ボランティアとは

	自発的	非自発的
私的	趣味・遊び	家事労働・仕事
公共的	ボランティア	仕事・公的な義務

学生座談会は「鳥取大学地域再生プロジェクト」の一環として、第1回目が2014年2月14日(金)、第2回目が2015年2月18日(水)、それぞれ2時間程度の計2回実施された。第1回目は2・3年生12名を2グループに分け、第2回目は第1回目に参加した者から4名を対象として実施した。いずれもファシリテーターとして、地域実践にかかわってきた学生2名を討議に加えている。座談会のテーマは、地域実践の意義とし、それぞれの活動を振り返りながら話し合うこととした。今回の分析は、主に第2回目の座談会の記録を基にしている。第1回目の座談会から地域実践に参加する動機の類型化を行い、第2回目の座談会において仮説として提起し、参加した学生に検討を加えてもらうことも意図していた。

図1は理念型として、大学生の地域実践における欲望のあり方を示したものである。縦軸は(相互)承認か(自己)実現か、横軸は意味か強度



図1 地域活動の在り方の4類型

を示している。それぞれの象限を、欲望の宛先として「交流」「使命」「理解」「獲得」と命名しておく。第1象限は、たとえば「ありのままの自分を認めてくれて娘のように大事にしてくれる」「感謝すること、されること」(第1回座談会での発言)というように、具体的な相手からの承認を求める——それも内容ではなく承認それ自体——在り方である。出会いを強調するのもこの類型である。第2象限は、むしろ内容に関わる承認である。社会的に意味のある内容、自分だからこそできる貢献などが含まれる。第3象限は「日本をふっと上がって見れた」「刺激になる」「活動を通して現状を知って

いく」(第1回座談会での発言)などを含め、自身の内側に何らかの変容を伴う経験(学習)を強調する在り方である。そして第4象限は何らかの成果を求める、しばしば量的に把握可能な目標を達成することを目指すInり方である。

この類型は、学生個人個人のInり方を示しているというよりは、その時々々の状況に即して、その場での人間関係において選択される戦略のようにも思われる。後に第2回の座談会の発言を拾いながら確認していくが、活動への参加の動機や得たものとして語られる内容は、複合的でありかつ可変的である。なおこの理念形は、岡田斗司夫による欲求の4タイプ³を筆者が改変したものであり、議論の活性化のために提示したものであった。

2. 地域に出ることの意義の語られ方

座談会は、それぞれの関わってきた地域実践の紹介から始まり、この1年間の変化についての情報交換から始まった。座談会に参加した6名が行ってきた活動は、大学の講義として行われている調査実習や海人町訪研修、海外フィールド演習などを含め、商店街の活動や映画の自主上映、「森の健康診断」、「ホスピタイル」、過疎地域のむらおこしなど多様である。実習ということもあり、ライフストーリーの聞き取りなどの調査活動を行っていることも少なくない。また卒業論文として地域実践のキーパーソンへのインタビューを行っている者もいた。以下、仮説に添う形で参加者の発言を拾いつつ、また仮説の枠組みを再検討するための発言を確認しながら検討をすすめる。

1) 「交流」としての地域実践の意義

ファシリテーターでもあったKIさんは、調査という形で地域実践に加わり、データの解析等をするなかで、「これは自分には向かないなっていうことが分かって」と述べ、人と関わることの大切さに、改めて気づいたことを述べる。

「目的を持ってじゃないんですけど、話すっていうことがやっぱり楽しいじゃないんですけど、自分も得られる情報も多いし、データで得られることもあるんですけど、自分の考えが広がっていくっていうのが、話したりたら生まれてくるんだなあって」

こうした交流という意義を一貫して主張していたのは、KAさんであった。座談会後の感想文でも「今までの地域活動では地域の人との「交流」を重視していました」の述べ、「交流のない地域活動は意味がないと思っていた」とまで記す。一方で、もう一人のファシリテーターでもあったNさんは、「交流」の不全について語る。

「地域の人と(中略)商品開発をしたんですけど、このおじさんが、何か言っているのか分からないんですけど、めっちゃもうけたがっていて。何かすごくて、地域

うんぬんよりも、そもそももうけたっていうのが強いんだなっていうのが、すごい本当にいろんな人がいるっていうのが、いろいろっていうのが何となく分かってきたなっていうのを思いました。」

地域実践の中では共感できる人々とのみ出会うわけではない。また必ずしも学生が関わることでそれ自体を喜んでもらえるわけでもない。交流できない(したくない)他者であった場合、それでもなお地域実践を行うことで、どのような意義を学生は掴み取るのだろうか。

Nさんは「どういうふう地域に自分が入っていくとか、自分の立ち位置を考えたりとか、すごく自分と地域の位置関係について考えられるようになったりとか、自分を外から見られるようになったりとか、いろいろ何か立ち位置が分かったかなって思います」と、地域実践への関与のあり方を変更しようとする。そうしたNさんが学んだこととしてあげるのが「責任」である。

「やっぱり地域にどんと突っ込もうと思ったら、やっぱり責任を持って行くのであれば、しっかり学生っていう肩書ではなくて、もう個人として突っ込んで本当に元からいましたけど、みたいな(笑)。感じて過ごすのが、本当に意味がある活動ができるのかなって思います。」

明示はされていないが、この発言は具体的な成果を成し遂げることで地域に貢献する必要性を、「責任」と表現していると思われる。学生にとって地域の役に立つことは難しい。「地域は予想以上にリアリティを求めている」と言うTOさんは、「活動に人を呼び込む(広報)ことの難しさ」を感想文に記している。しかしながら自分が何かを与えることができないのならば、地域実践に参加しても立ちすくむほかはなく、役立ち感も得ることができない。むしろ学生を受け入れる地域実践の側が役割を準備するべきかもしれないが、いずれにせよ何らかの役割を果たし、獲得する契機が両者に必要とされるのである。

2) 「獲得」としての地域実践の意義

TOさんは、グリーン・ツーリズムの拠点のひとつに「地域づくりインターン」として参加したときの体験を、お客さんと一緒に行った自然体験は楽しかった(「交流」としての意義)としながらも、次のように語っている。

「ちょっと地域との交流もうつつあるんですけど、主にやっていた作業が、そのコテージの掃除とかで、午前中は毎日それなんです。本当に接客業がメインで、掃除でも窓を徹底的にきれいに磨く方法とか、そういうのばかりが身に付いて」

このようにある意味で労働力として期待されていた(地域

実践にとっての「獲得」としての意義) ことに否定的な評価を下す。しかし TO さんは一方で、将来の希望として農業をあげ、その役に立つような「自分の経験のため」の地域実践を求めて、農業に関わることであれば積極的に無償で活動を行うとも述べる。

筆者はかつて「自分のためボランティア」と称して、社会のためにボランティアを行うことよりも、自分のためにボランティアを行うことの方が活動を継続するためには誘引として働くことをしてきたⁱⁱⁱ。「私は鳥取って映画を見られる場が少ないなと思ったから、映画を見られる場をつくりたかったし、自分自身のためにやってきたっていうことが大きかったと思う。」「いかにもっと多くの人を呼ぶか」みたいなことを考えながら、その映画を中心に、いろんな人と出会っていきっていうことをやってきました」と述べる TA さんの発言はその典型例であるように思える。「大きく社会についてとか人についてとかをよく考えるっていう行為で、人を集めることとか、この世界どうなっているんだろうみたいな想像力をどんどん付けていく訓練をしていったかなって思うんです」と、自分の能力の獲得に地域実践の意義を見出している。

ただしこうした動機が成就するのは、自分の「獲得」と地域実践にとっての「獲得」が重なっている場合であろう。TO さんはそうした意味づけができないときに、引いてしまって立ち止まると述べる。

「地域のイベントとかあるじゃないですか。ああいうの行ったときに、行って、「すごい何かいい経験になった」とかじゃなくて、「何でこの人はこういうのやったの?」っていうのに気が迷って、すごい我に帰るんですよ。そのイベント中に。それで、楽しくなくなるみたいな(笑)。ふっと我に返って、「何でこういうしているの、この人?」っていう方がきになっちゃって、何か一歩引いちゃうというか、それに参加しようとしないうるか、そういうのがあって、この間の映画見に行ったときも、「何でこの人らはそういうものをつくっているんだろう?」とか。それからもう、そこで自分が止まっちゃって。」

3) 「理解」としての地域実践の意義

先の TO さんへの一つの回答が M さんの発言である。「学生とか、もともと、去年もこの話出ていたと思うんですけど、っていう看板しょって地域に入ることにはあんまり意味がないって私は思っている」と述べる M さんは、では学生が地域実践に参加する意味は何かと自問する。

「だから、学生が地域で活動することに意味がないんじゃないくて、学生が地域で活動する意味はあるけど、学生っていう立場を振りかざすと言うか、それを誇張しすぎるのは、双方にとって意味がないことになるんじゃないかなって私は思うかな。何か他者だからできることも多分あると思うんです。」

「何か、あくまでその地域にいない人は、きっかけを与える人であって、実際その地域を良くする人は当事者じゃないといずれは崩れるからってなったら、学生が活動するんだったら、あくまできっかけづくりとか」

K さんは「住民の人が気付くきっかけとか、学生側が新しい価値観を持つきっかけとか、そのきっかけに意味を見出せば、その交流に無駄なことはなくて」と、必ずしも学生であることの価値を否定しない。むしろ地域にとって学生が他者であることのメリットに気付くことの必要性を主張している。こうした意見は数多く、学生が地域のことを理解する(「地域の現状について知る」、「いろんな価値観」という価値だけではなく、逆に地域住民がよそ者としての学生のことを知るという側面も指摘されている。「私たちが行くことによって刺激になる」「ざわざわする」「自分たちが何もないって思ってたような当たり前を崩す」「地域の魅力の再発見」(第1回座談会)という発言は、他者としての学生の価値を意味づけようとする学生自身の言葉である。

M さんの感想文には、最初は「とりあえず参加してみよう」という気持ちであったものが、「私はなぜこの活動に参加しているのだろう」「なぜこの人たちはこのような活動を企画したのだろう」と考えるようになったと述べる。

TA さんもまた最初は「授業の延長線上のものとして活動に関わっていた」のだが、「今自分が参加している活動の意味を「考える」ようになった。そもそも自分は何を「おもしろい」と関心を持つのかなど逐一問うことで様々な知らないものへの欲求が生まれた」と述べる(感想文より)。知ること、考えることが地域実践に参入する動機として立ち上がるのである。

4) 「使命」としての地域実践の意義

しかし自らの知識欲だけでは地域実践への参加は果たせない。K さんは、地域実践の支援者を対象とした調査を卒業論文で行っていた。

「今までは結構いろんなことに参加してみよう、みたいなぐらいの気持ちでやっていて、人が好きなので、結構その人の話を聞きに行ったりとか。イベントも好きだったし、ぐらいの自分の興味関心で、ちょっと動いていた部分、結構自分のためにみたいなのが大きくて、ベトナムのフィールド演習も、何かベトナムの人に還元するというよりは自分のために、インターンも自分が面白そうだからぐらいで参加していたんですけど。卒業論文を書くときの調査は、何か今までとは違う責任感みたいなものがすごいあって、無責任な結果でと言うか、書き方とか、情報の聞き方、伝達の仕方とか、自分の思いがちょっと偏りすぎていたとかがあって、でもそれを一つの論文にするって考えたときに、何かすごい無責任なデータとか、自分の思いだけで、思いも書いたんですけど、ちゃんとそれを裏付けできるようなデータを集めようと

か、インターン生とか住民の人の仲介者の人のためにみたい、これからの活動のためにやろうみたいなのが一番自分の中では、気持ちの持ち方みたいなのはちょっと変化だったかなーと思います。」

これらの発言からは、単に学生がきっかけというだけではなく、学生としての「責任」は学ぶことであり、それが地域の役に立つことが必要であるという意識を伴っていることが分かる。

「たとえ学生であっても当事者意識を持った関わり方っていうのが大事なんじゃないかなっていうのは、自分が地域に入るときはなるべく心がけるにはしている。」と言うMさんの発言を受けて、TAさんは「地域の人にまた何かを返さなきゃいけないっていうときに、やっぱり学生としては一つの責任がある」と述べる。それは2)で述べたような地域実践にとっての具体的な成果を獲得するというものもあるのだが、一方で次のようにも述べる。

「一歩下がった視点で、客観的に見るっていうことが一番必要で、私たちは地域学っていうことを理論的に学んでいて、その地域の人たちの葛藤も知りながらも、何でそこに葛藤が生まれるのか、何で問題が生まれるのかっていうことを考えていって、結果としてまた解決できるのかどうか分からへんけど、一緒に考えていく」

何が必要なかを考えて実践につなげることは、地域実践の現場だけではない。Kさんの地域実践で得た理解は、自分自身の生活を振り返ることで、自身の生活実践を促す契機ともなる。「使命」という言葉は使われていないものの、考えられたものを形にしたい、実践することに意義を見出そうとする在り方が確認できる。

「ライフヒストリーとか聞き取りしてきたけど、自分のおじいちゃん、おばあちゃんには何の話も聞いてなかったりとか、そういうとこにちょっと違和感があって、でも社会人になってからも、そういう身近な所とか、身近な活動とか、自分が生活する場所を、自分が主体になってどう働き掛けるか。社会人として自分の生活を歩む、その時間の中で、自分のこの考え方っていうのは、この4年間でできたのかなーって思うけん、別にそれが社会人として働く中で活かされるだろうし、その時間外にも、もっと身近な所の活動っていうのを、私は近くのことを大事にしていきたいなーって思っている。」

3. 考察と課題

多くの学生にとって、地域は（自らもその一員であるにもかかわらず）未知の領域である。そうした学生にとっては、日常的な人間関係や規範を離れ、外側から自分を見つめなおす契機を提供するであろう。たとえば「自分の日常・地域・生き方を相対化」することを目的として行われた、短期の「海

外フィールド演習」の意義として仲野らは次のように述べるiv。「近代的な暮らしの利便性への疑問」や「地域における「家族」や「幸せ」のありかた」「「他者」との関係性」であり、それは「これからの自分の生き方を考えようとするスタイルの学び」、「社会参加への一歩を踏み出す」こと、「新しい社会的ネットワークの形成」へとつながるとい展望が描かれている。海外とは比べ物にならないかもしれないが、わたしたちが日常を離れ、ある地域で他者と出会うとき、同様の効果が期待されるだろう。

今回、仮説に即して学生の発言を検討する中で、「交流」「成功」「理解」「使命」と類型化した意義を確認することができた。そしてこれらは「他者」とどのように出会うのかという類型としても考えることができるだろう。

またこの意義は学生にとって、移り変わるものであった。和井田らは、利己的な動機からボランティア活動に参加したとしても、「活動を続けるうちに「子どもたちの笑顔が見たい」といった利他的な動機にシフトしていく可能性」を指摘するv。座談会では、当初の動機がうまく作動しなかったとき、視点を変えることで失敗に思われていた体験が、地域実践に関わる立ち位置を変えることで別の意義が発見されることが示された。

地域実践の現場ではこうした視点の転換は、地域実践のふりかえりの中で行われるのだろう。参加する地域実践と学生のマッチングが重要ではあるのだが、それよりも問題なのはミスマッチが起きたときにそうした教育的支援が行われるか否かであろう。これは学生に限ったことではなく、地域実践に関わる人々の振り返りの機会をどのように形作ってゆくのかは、より豊かな地域実践に向けて必要不可欠の課題である。

本論ではそれぞれの活動内容や地域住民の考えを踏まえて検討されたものではなく、学生からの一方的な話に依拠している。そうした点からも本論は学生にとっての地域実践の意義の見取り図を提起したに止まる。今後は地域住民の意見評価も含めて考察される必要があるだろう。またそのこと自体が多面的な意義を獲得するために機能すると考えられる。

i 森秀樹「カウンター・カルチャーとしてのボランティア」佐々木正道編『大学生とボランティアに関する実証的研究』ミネルヴァ書店、2003年。

ii 岡田斗司夫『人生テスト一人を動かす4つの力』ダイヤモンド社、2000年。

iii 倉掛比呂美，大谷直史「大学生にとってのボランティア活動の意味」『鳥取大学教育地域科学部紀要』5(2)，pp209-227，2004年。

iv 仲野誠・小泉元宏「海外フィールド演習」における他者との出会いの効用（2）——インドネシアプログラムに参加した学生の経験から考える——』『地域学論集』第11巻第3号、2015年。

v 和井田節子他「被災地支援ボランティア活動が教職志望の大学生に与える教育的意味——石巻市内の小学校における支援活動を通して——」『共栄大学研究論集』第11号 p.267。